

I 【学生】 「授業評価アンケート」 結果報告

結果まとめ

授業評価アンケートは、くらしき作陽大学および作陽音楽短期大学（以下、本学）で平成29年度に開講された全授業の全履修生を対象として前期および後期の最終授業においてそれぞれ行われた。この報告書で取り上げたのは、欠席5回以下の履修生（以下、履修生）の回答のみである。回答全体からは、履修生が教養科目よりも専門科目を重視している傾向が窺われた。また、回答が部局によって著しく異なる場合もあった。

出席率は、欠席1回以下の履修生が大半であり、比較的高かった。だが、シラバスは全学を通じてあまり活用されていない。予習と復習の時間については、それぞれ1時間以内と回答した履修生が大半であった。また、各部局の評価の割合は必ずしも一律ではなかったが、履修生の7割前後の者が自分自身は授業評価者として適切であると評価していた。

授業はシラバス通りに行われていたと履修生の大半が評価している。しかし、シラバスの活用度を勘案すると額面通りには受け取れない。なお、テキスト選定や板書などの授業技術に関する評価は高かった。履修生の8割前後が授業は工夫されており、適切に実施され、わかりやすかったと評価している。また、履修生の8割前後が授業者に意欲を感じており、授業を理解できたと評価している。

授業の到達度に関しては、履修生の7割前後が目標に到達したと評価している。そして履修生の8割以上は専門科目を興味深く良い授業だと評価している。一方、教養科目を興味深く良い授業としたのは履修生の7割前後であった。この違いは、両者の授業の質ではなく、履修生の授業に関する意識に起因すると考えられる。授業の成果としては、知識技能の習得が挙げられた。なお、教養科目により人間理解の深化、人間形成の促進、協働力の向上がなされたという評価もあった。レッスンの成果としては、表現力、知識、技術および学習への意欲が向上させられたことが挙げられている。

1. 調査の概要

(1) 一般科目に関する回答者数（延べ人数）（レッスンを除く）

開講期	所属 ＼ 学年	院	音楽	食文化 現食	食文化 栄養	子ども 教育	短大 音楽	短大 幼教	その他 ・ 未回答	計
前期	1	11	408	753	1511	2099	295	589	97	5763
	2	1	537	603	1405	2408	222	333	101	5610
	3	-	448	514	1021	1610	10	-	108	3711
	4	-	121	209	166	354	-	-	16	866
	未回答	0	6	14	7	21	1	1	35	85
	前期計	12	1520	2093	4110	6492	528	923	357	16035

開講期	所属 \ 学年	院	音楽	食文化 現食	食文化 栄養	子ども 教育	短大 音楽	短大 幼教	その他 ・ 未回答	計
後期	1	18	392	807	1522	1921	285	716	95	5756
	2	8	549	544	1357	1998	209	181	104	4950
	3	-	391	323	473	1483	12	-	82	2764
	4	-	131	95	222	301	-	-	24	773
	未回答	1	1	18	23	23	1	3	42	112
	後期計	27	1464	1787	3597	5726	507	900	347	14355
	年間計	39	2984	3880	7707	12218	1035	1823	704	30390

(2) アンケートを実施した科目数 (レッスンを除く)

開講期\科目種類	教養	専門	計
前期	144	465	609
後期	139	487	626
計	283	952	1235

(3) レッスンに関する回答者数 (延べ人数) (音楽学部学生のみ)

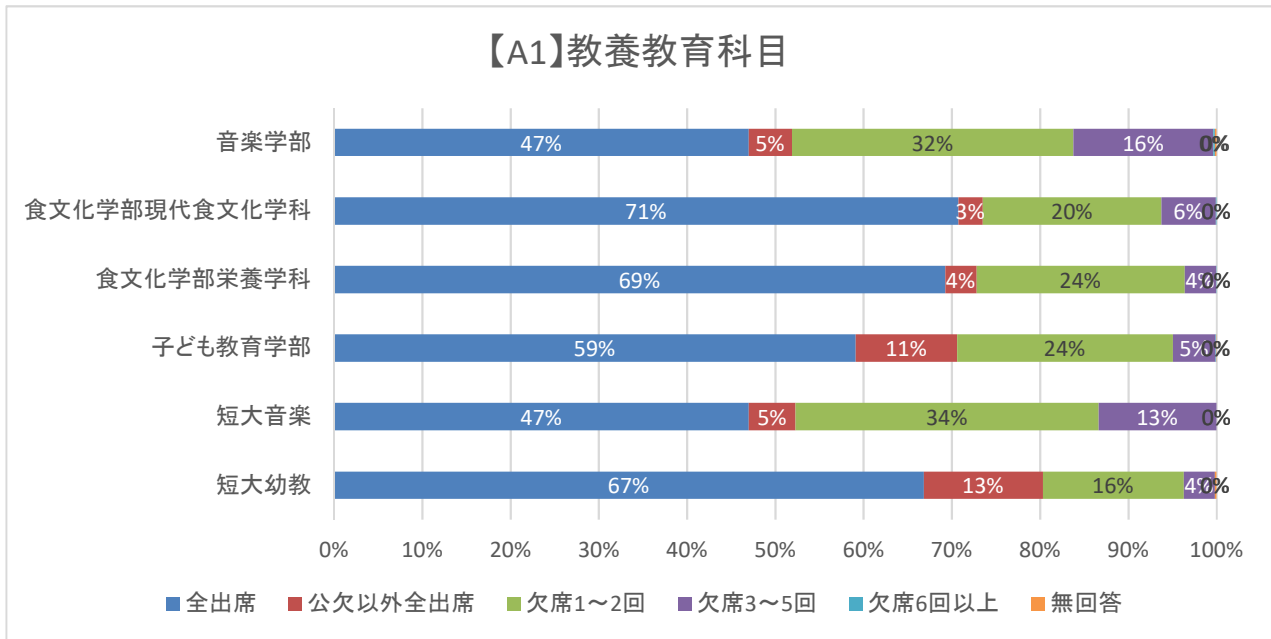
開講期	学年	回答者数 (述べ人数)
前期	1	68
	2	70
	3	26
	4	37
	未回答	2
	前期計	203
後期	1	55
	2	55
	3	36
	4	17
	未回答	1
	後期計	164
	年間計	367

2. 調査の結果

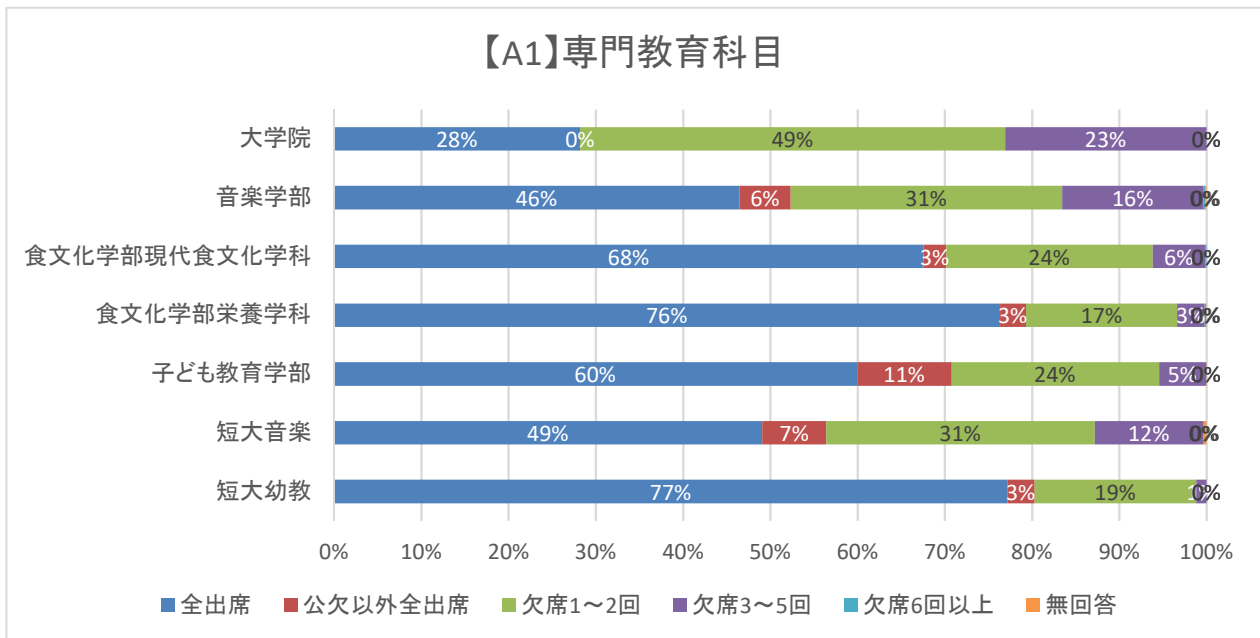
アンケート調査結果は、次ページ以降に述べる通りである。

A 授業への取り組みに関する質問

1 あなたは授業にどの程度出席しましたか？

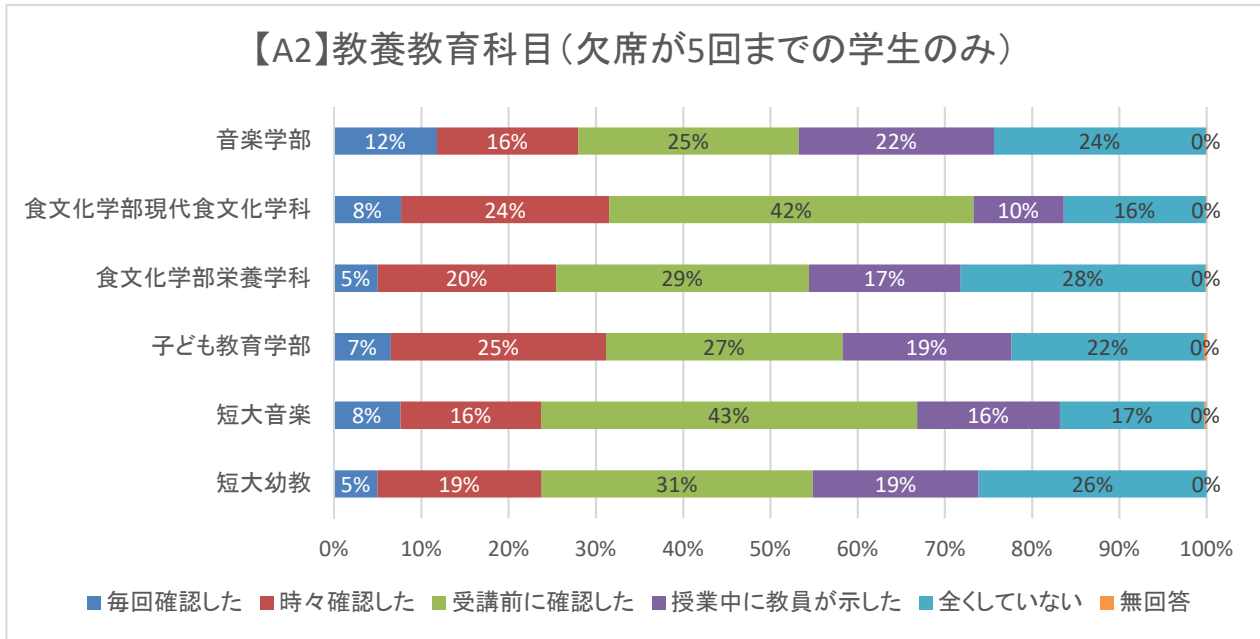


どの学部学科でも全回出席の学生が一番多く、次に多いのが欠席1~2回の学生である。欠席1回の学生の割合は81%（2回までは96%）であり、出席へのまじめさが窺われる。ただ、音楽学部と短大音楽専攻の学生の出席率は他の学生と比べて低い。他方、短大幼教専攻の学生は出席率がよい。

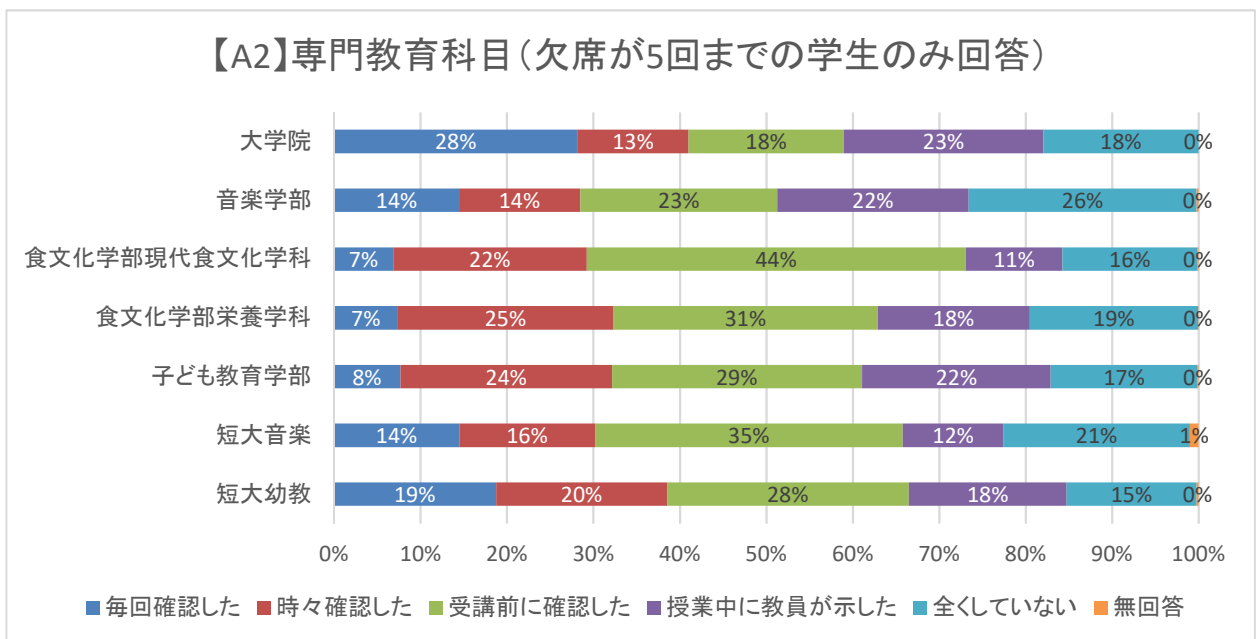


欠席については、教養科目の欠席率が高く、専門科目のそれは比較的低いという傾向は変わらない。全回出席率が高いのは栄養学科と短大幼教専攻の学生である。別調査（大学院除く）による5回以上欠席した学生ののべ人数（教養科目含む）を次に記す。音楽学部 325人（H28年度 337人）、現代食文化学科 226人（同 159人）、栄養学科 112人（同 86人）、子ども教育学部 186人（同 88人）、短大音楽専攻 82人（同 17人）、短大幼教専攻 29人（同 1人）。昨年度と比較すると、今年度は、音楽学部以外では、5回以上の欠席者が増えている。その原因を探り改善することが必要である。

2. あなたは、シラバスで授業の到達目標や授業内容について確認しましたか？

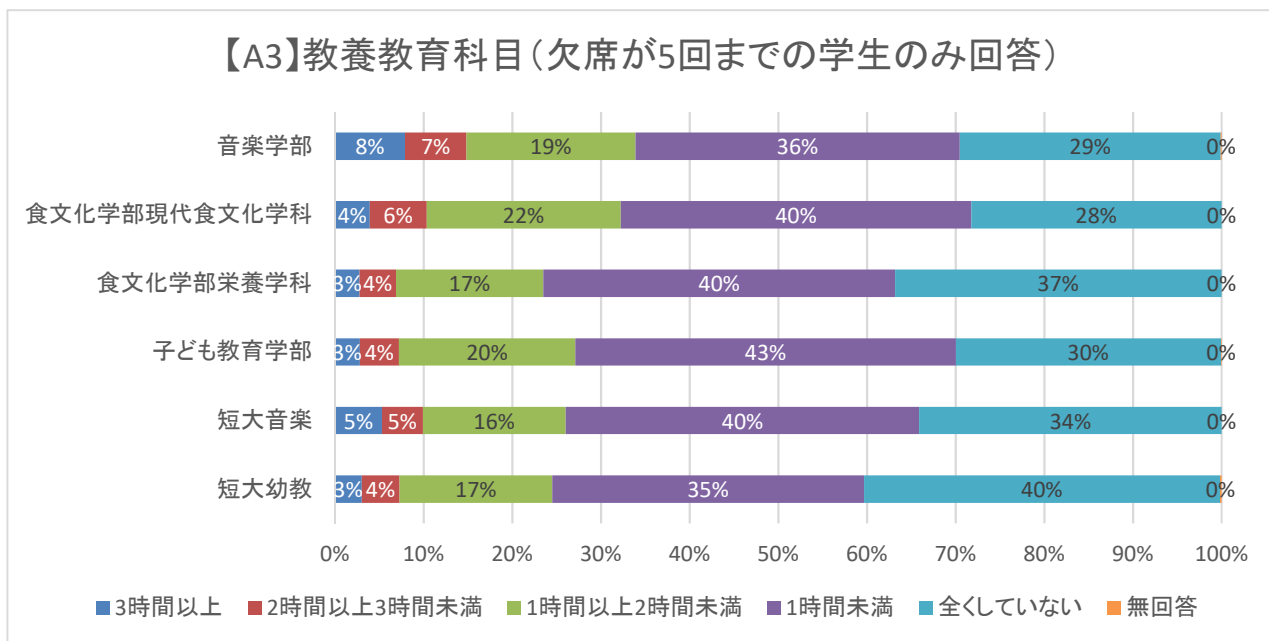


「毎回」事前にシラバスを確認して臨む学生の割合は5～12%（H28年度2%～18%）であり、いずれの学部学科においても非常に少ない。それは、シラバスを「受講前に確認」した学生の割合まで含めても53%～74%しかない。受け身の姿勢が強いことが窺われる。

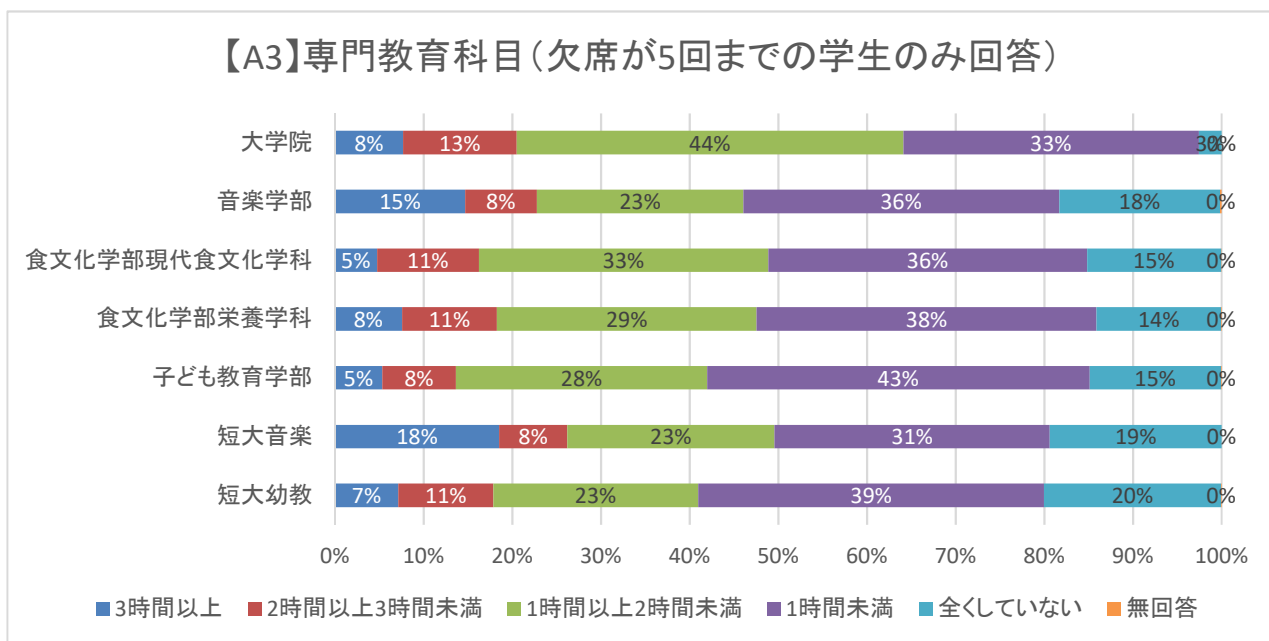


「毎回」事前にシラバスで授業内容等を確認して授業に臨む学生の割合は、大学院を除けば5%～19%（H28年度5%～15%）である。「受講前に確認」まで含めても51%～73%であり、この割合は、教養教育科目に関するシラバスの事前確認の割合同様、非常に低い。専門科目の授業に対しても受け身の姿勢が強いことが窺われ、教員の予告等がないと予習等は難しいことがわかる。

3 あなたは一つの授業について1週間あたり、予習・復習やレポート課題などのために平均どの程度学修しましたか（演奏系科目では、1日あたりの練習時間としてください）。



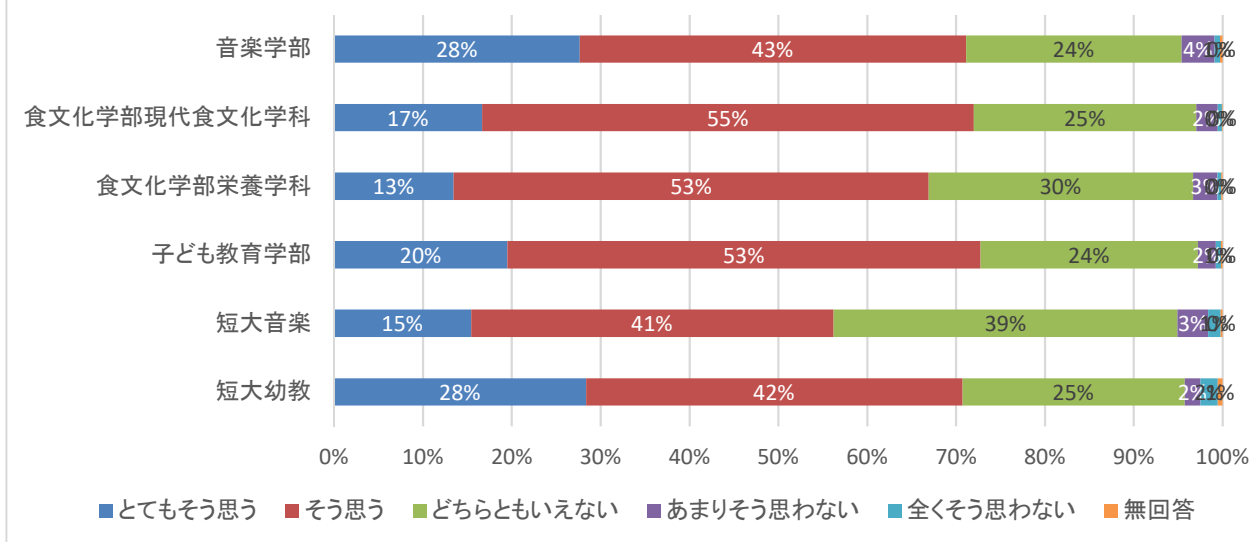
「全くしない」が28～40%（H28年度32～42%）、「1時間未満」が35～43%（H28年度27～42%）であり、授業外の学修は依然不十分である。



専門科目に関して予・復習等を「全くしない」学生の割合は、教養科目に関する割合と比べると半減しており、授業外での学修時間が増えている。しかし、大学院を除くと、どの学部学科でも「1時間未満」の学習時間の学生が最も多く、その割合は31～43%（H28年度33～59%）である。学修時間は全体的に不十分である。

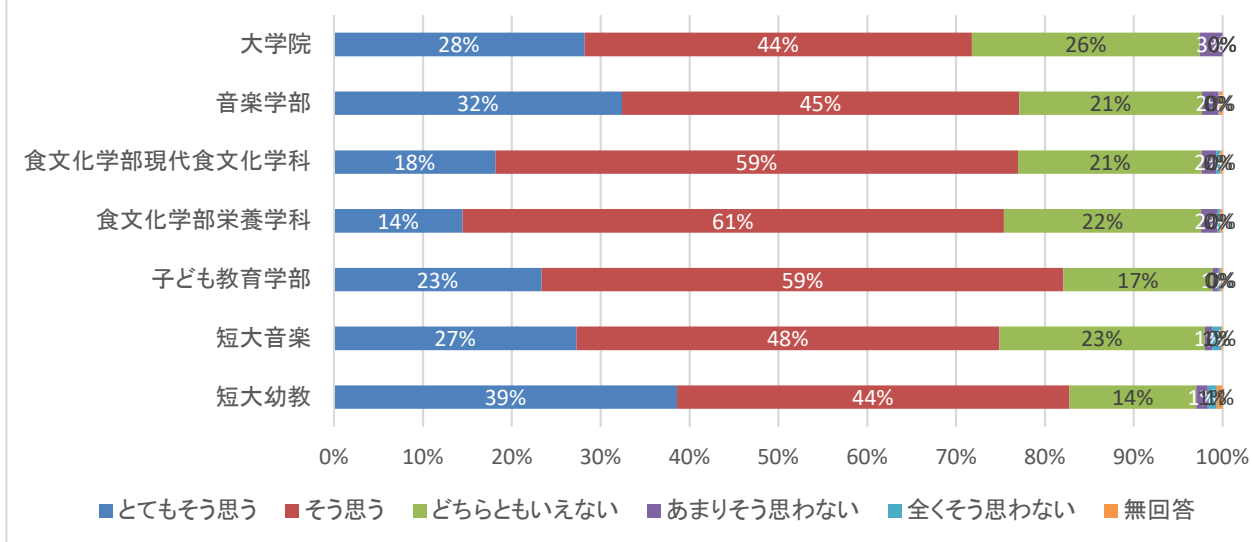
4 この授業への出席状況や取り組み態度から見て、あなたはこの授業を適切に評価できると思いますか。

【A4】教養教育科目(欠席が5回までの学生のみ回答)



授業の評価者としての自分自身の適切性への評価は高く、「あまりそう思わない」または「全くそう思わない」と回答した学生の割合は 5%弱 (H28 年度 3%~6%) にとどまっている。ただし、「どちらともいえない」という回答の割合も 24%~39% (H28 年度 15%~31%) と高く、評価者としての「適切性」についての自己評価はゆらいでいる。

【A4】専門教育科目(欠席が5回までの学生のみ回答)

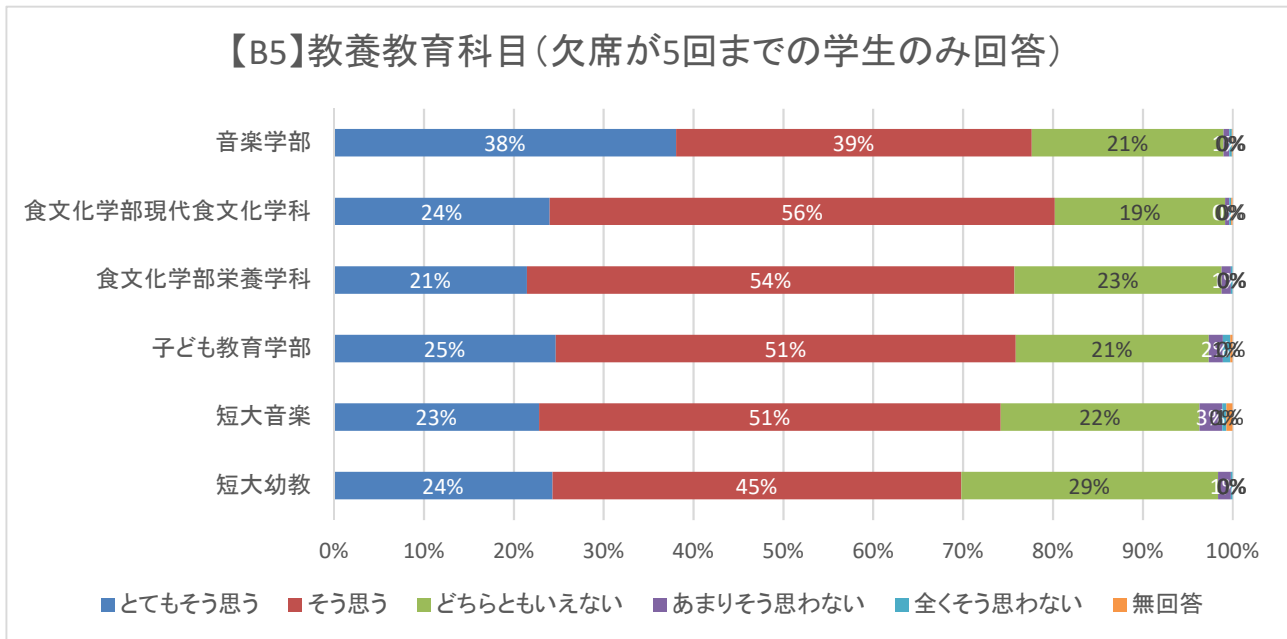


専門科目に関しても、評価者としての適切性への自己評価は高く、「あまりそう思わない」または「全くそう思わない」という回答の割合は 1~3% (H28 年度 同) にとどまっている。だが、教養科目に関する状況と同様、「どちらともいえない」を選んだ割合が 14%~26% (H28 年度 14%~36%) と高い。ここでも評価者としての「適切性」についての自己評価はゆらいでいる。

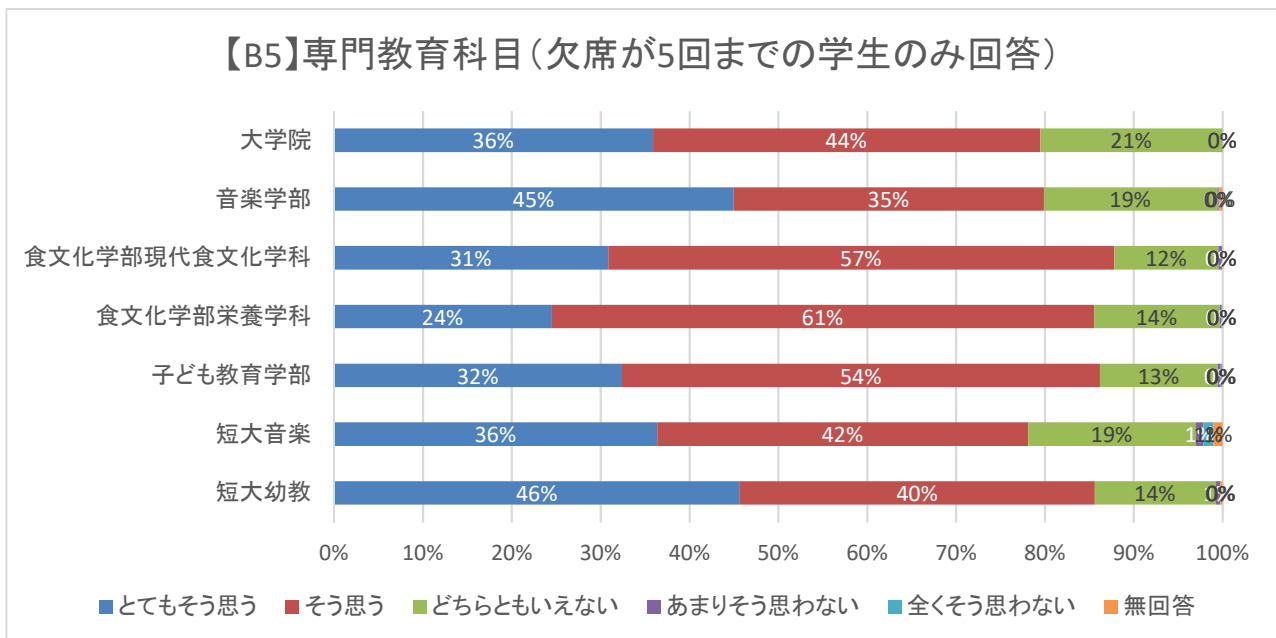
※この調査結果を踏まえて、以後の「B 教員の授業態度や授業内容に関する質問」「C 授業の成果に関する質問」については、この質問項目 (A4) において「とてもそう思う」「そう思う」「どちらともいえない」のいずれかを選択している者のみを抽出して集計した。

B 教員の授業態度や授業内容に関する質問

5 授業の内容は授業概要（シラバス）の内容に沿っていましたか。

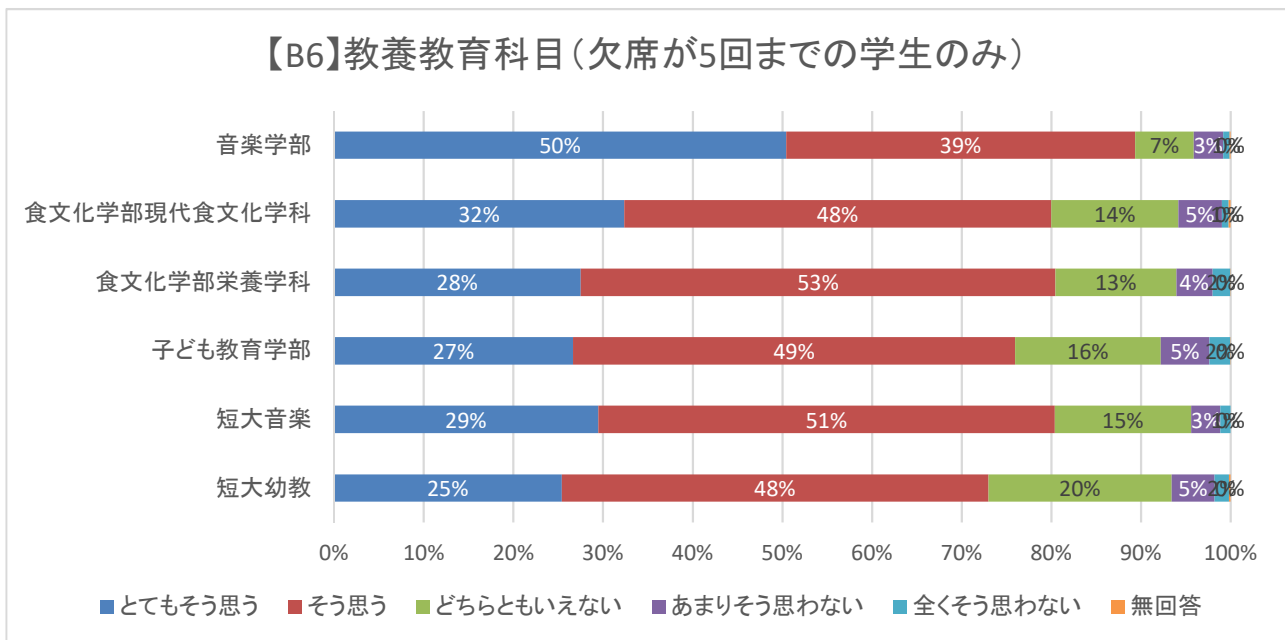


学生の69%～80%（H28年度69%～87%）が授業の内容は授業概要（シラバス）の内容に沿っていると考えている。「あまり沿っていない」または「全く沿っていない」と認識している学生はほとんどいない。

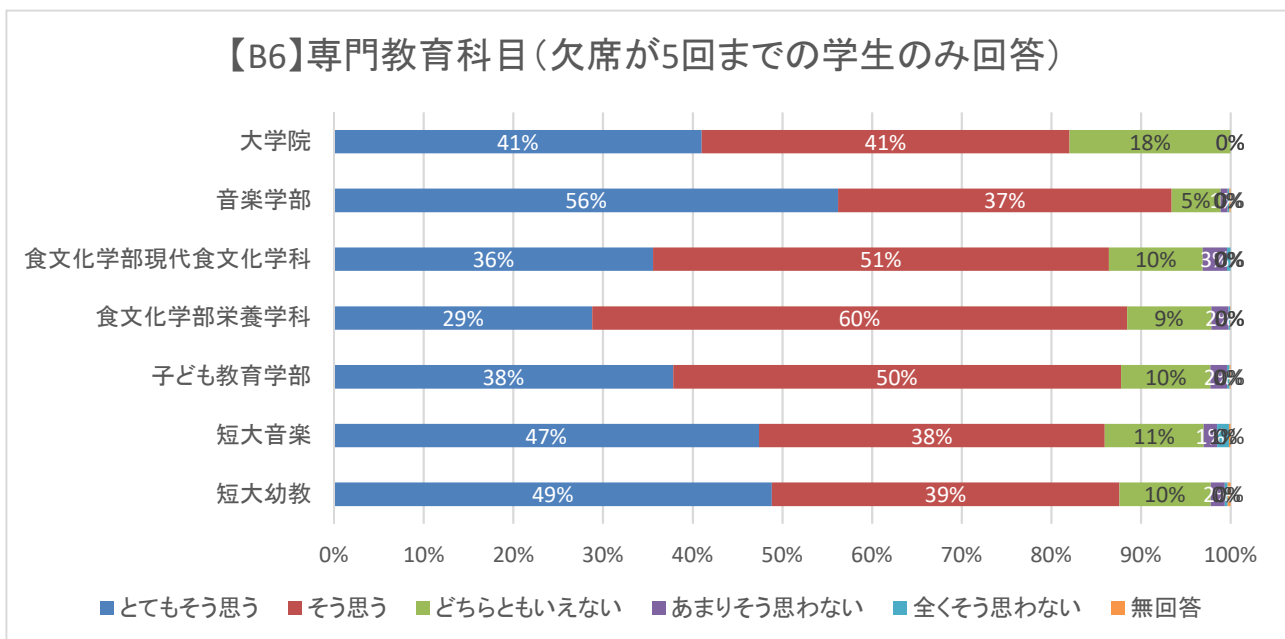


学生の78%～88%（H28年度65%～90%）が授業の内容は授業概要（シラバス）の内容に沿っていると考えている。授業がシラバスに「あまり沿っていない」または「全く沿っていない」と思っている学生はほとんどいない。なお、短大音楽専攻では、昨年度に比べると、授業内容とシラバスの整合性を肯定する学生の割合が高まった（64%→78%）。

6 テキスト・配付資料・黒板（ホワイトボード）の板書やパワーポイントの提示は適切でしたか。

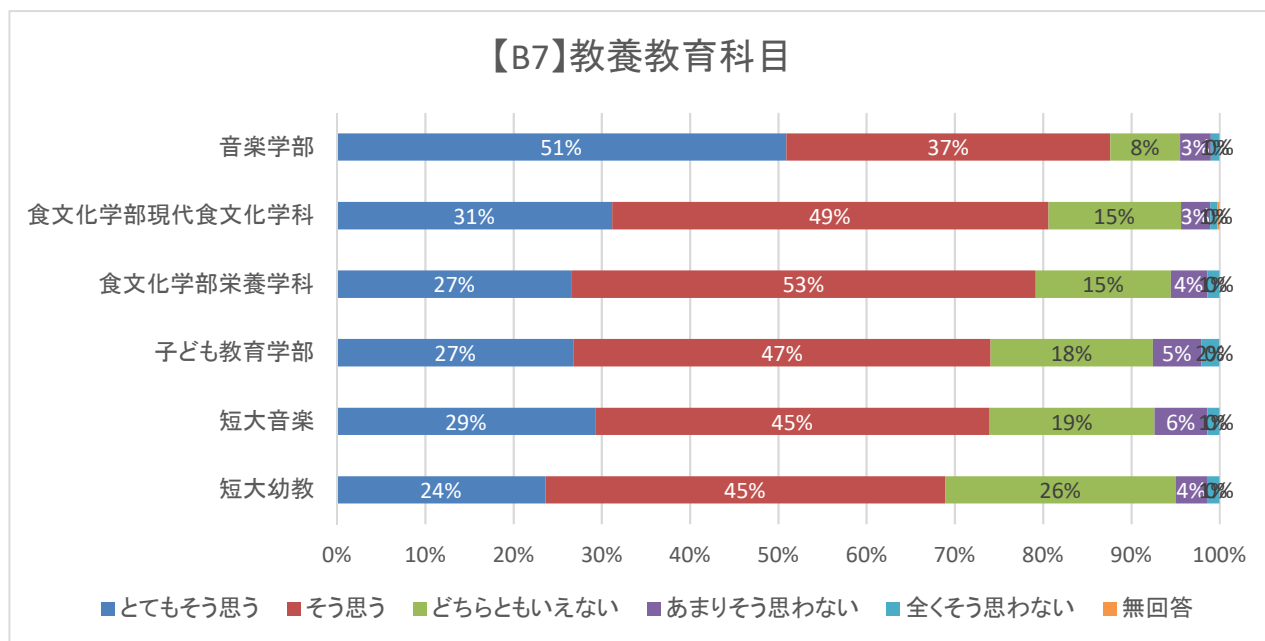


テキスト、配付資料、黒板（ホワイトボード）の板書やパワーポイントの提示は適切だ（「とてもそう思う」または「そう思う」と肯定的に評価している学生の割合は 73～89（H28 年度 80～88%）である。評価は概して良好であるが、部局間に差が見られる。なお、否定的評価はどの部局でも極めて少ない。

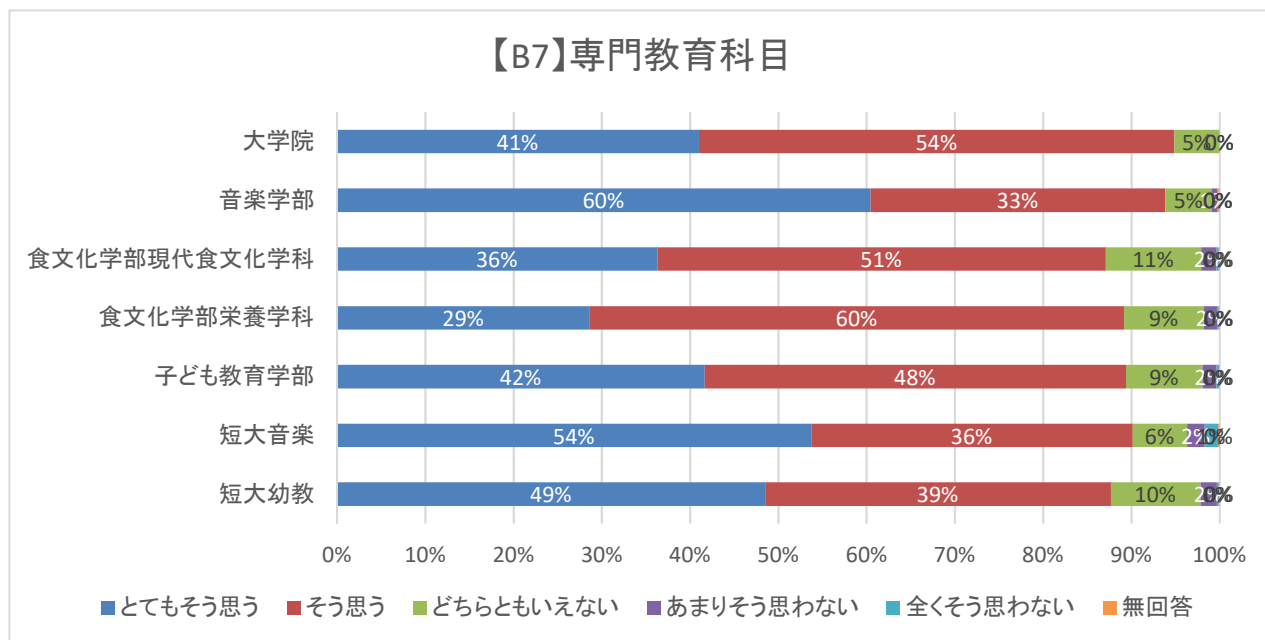


学生の 90%前後（大学院は 82%）が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答しており、テキスト、配付資料、板書やパワーポイントの提示は適切だと考えられる。昨年度の割合と比較すると、「とてもそう思う」または「そう思う」の回答率は、大学院と短大音楽専攻においては、それぞれ 10 ポイントおよび 7 ポイント下降したが、短大幼教専攻では 8 ポイント上昇している。

7 理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか。または演奏の技術や音楽表現についてわかりやすく説明されましたか。

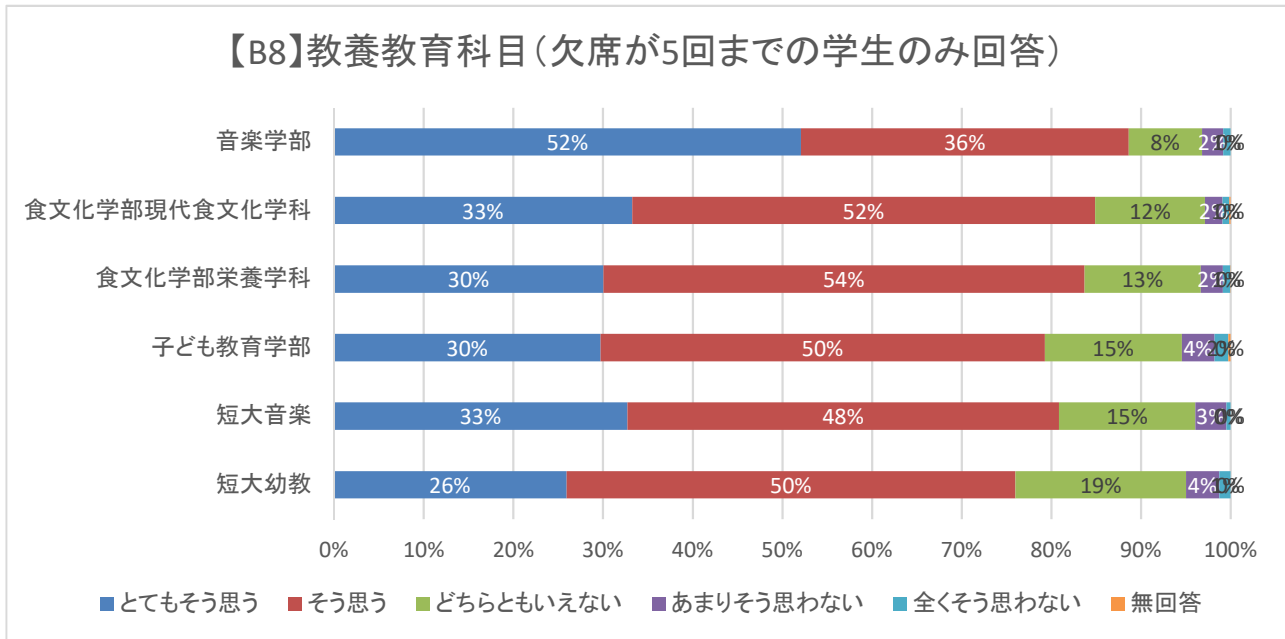


学生の69%～88%（H28年度75%～85%）が理論や考え方、専門用語、演奏の技術や音楽表現についてわかりやすく説明されたと認識している。「とてもそう思う」または「そう思う」と回答した学生の割合は音楽学部で最も高く、これに食文化学部、子ども教育学部、短大音楽専攻、短大幼教専攻が順に続く。

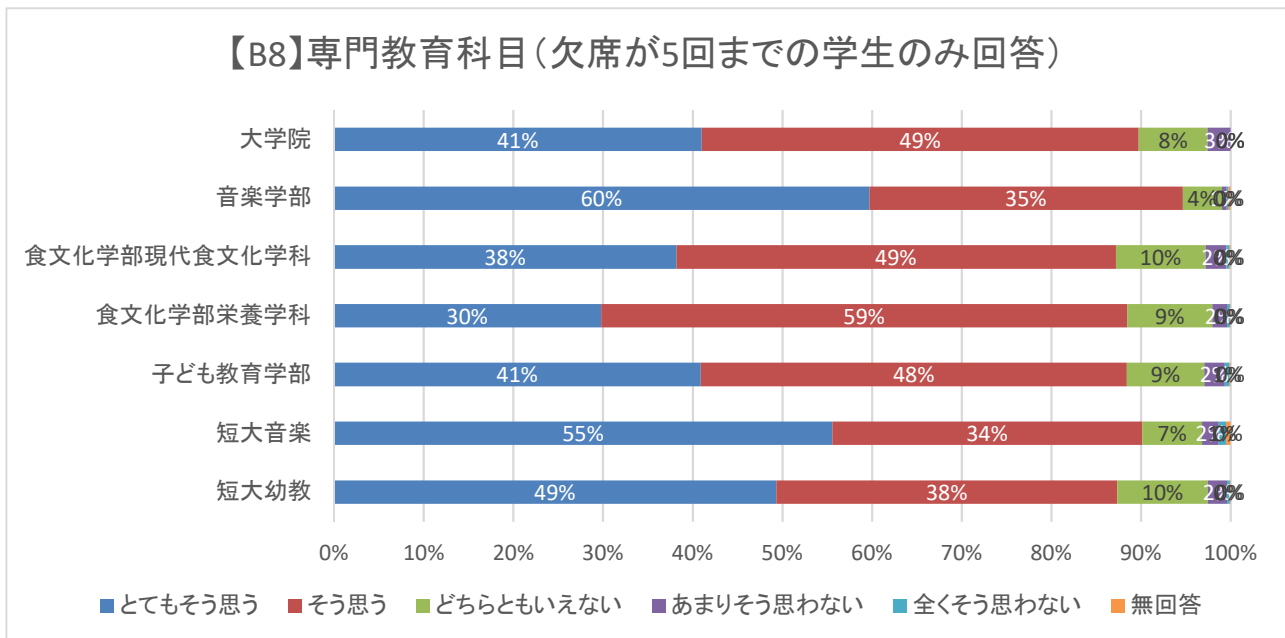


学生の87%～95%（H28年度85%～93%）が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答しており、理論や考え方、専門用語、演奏の技術や音楽表現はわかりやすく説明されたと認識している。学生の実態に合った説明がどの部局でも、どの授業においてもなされていることが分かる。特に、大学院と音楽学部の学生の肯定的評価の割合が高い。

8 授業方法の工夫や時間配分は適切でしたか。

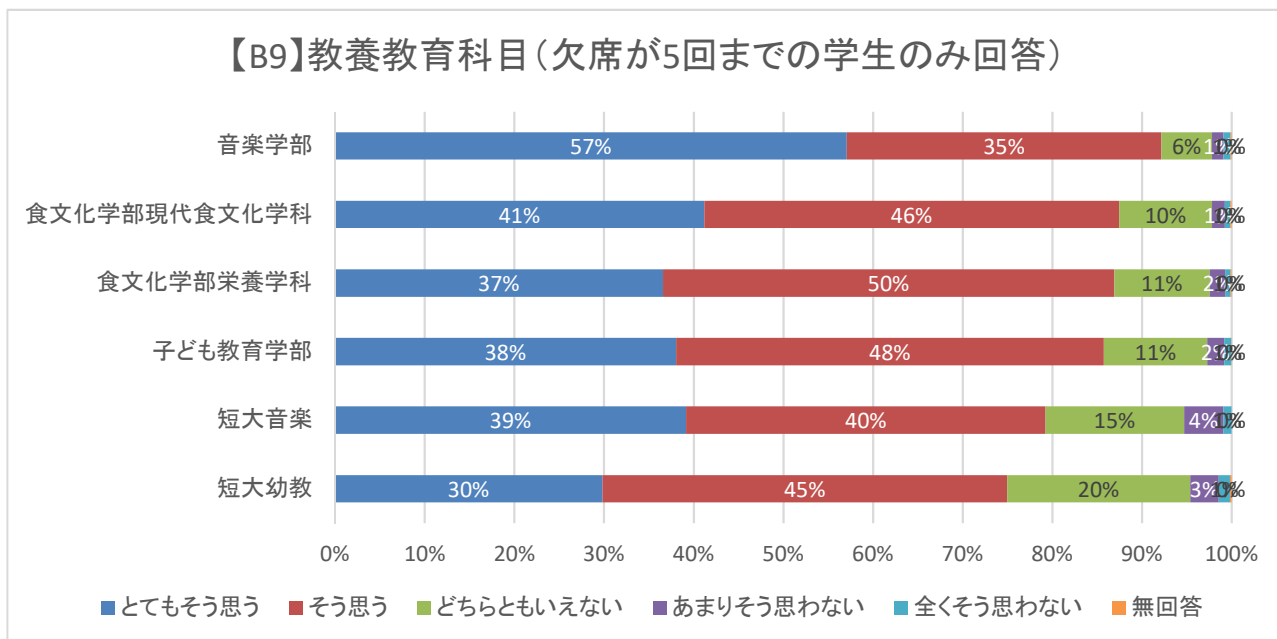


授業方法の工夫や時間配分の適切さについて「とてもそう思う」または「そう思う」と回答している学生の割合は76%~88% (H28年度85%~90%)であり、概して良好である。ただし、部局間には差異がみられる。「とてもそう思う」または「そう思う」という肯定的回答の割合は音楽学部で最も高く、これに食文化学部、子ども教育学部、短大音楽専攻、短大幼教専攻が順に続く。

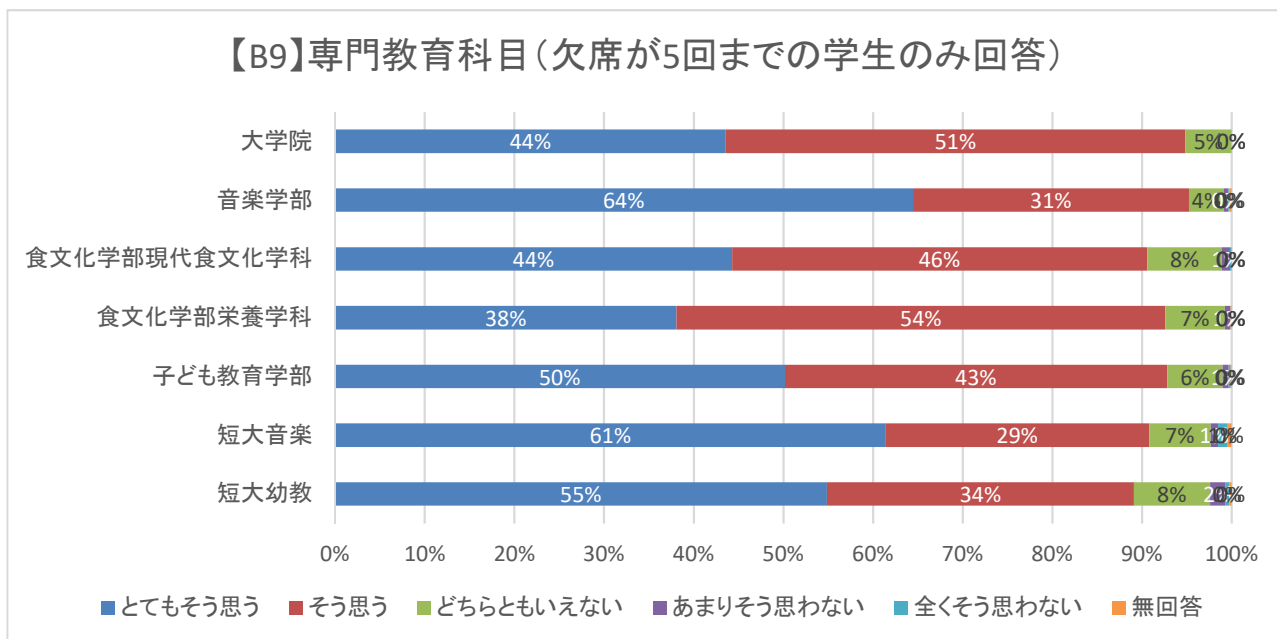


学生の87%~95% (H28年度85%~95%)が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答している。したがって学生は、授業方法の工夫や時間配分は専門科目においての方が教養科目においてよりも適切に行われていると認識している。中でも音楽学部学生の工夫や配分の適切性についての評価は抜きんできて高い。

9 この授業に対する担当教員の意欲や熱意を感じましたか。



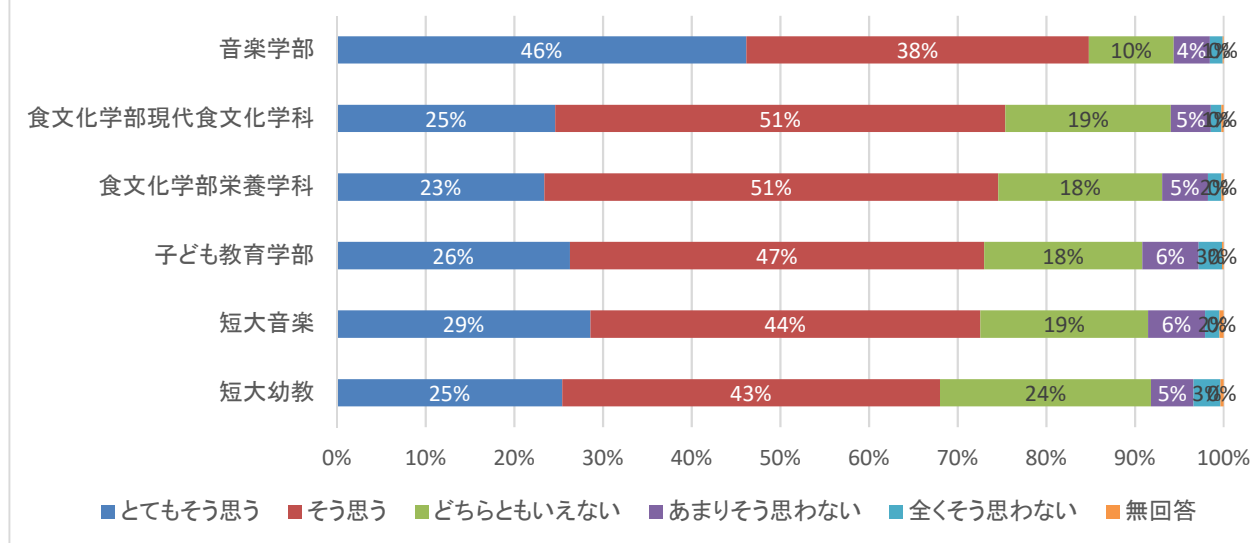
学生の75～92% (H28年度82～93%)が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答しており、担当教員の授業に対する意欲や熱意を感じている。ただし、前問同様、部局間に差が認められる。



学生の89～95% (H28年度85～97%)が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答しており、ほとんどの学生は、担当教員の授業に対する姿勢に意欲や熱意を感じている。なお、大学院と音楽学部の学生においては、肯定的回答の割合が95%に達している。

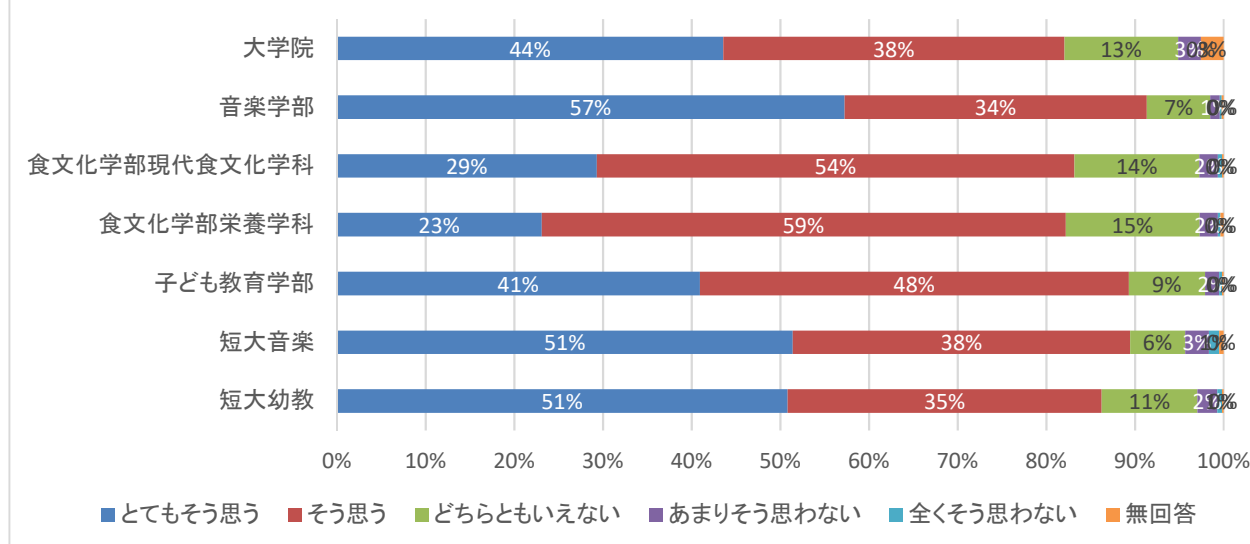
10 授業内容はよく理解できましたか。

【B10】教養教育科目（欠席が5回までの学生のみ回答）



内容の理解については、学生の68%～84%（H28年度75%～82%）が「よく理解できている」または「理解できている」と肯定的に回答している。ただし、肯定度は部局間に差が認められる。全体としては、授業内容の難易度は適切だといえる。なお、専門科目に比べると、「あまりそう思わない」学生が若干多い。その学生には配慮が必要である。

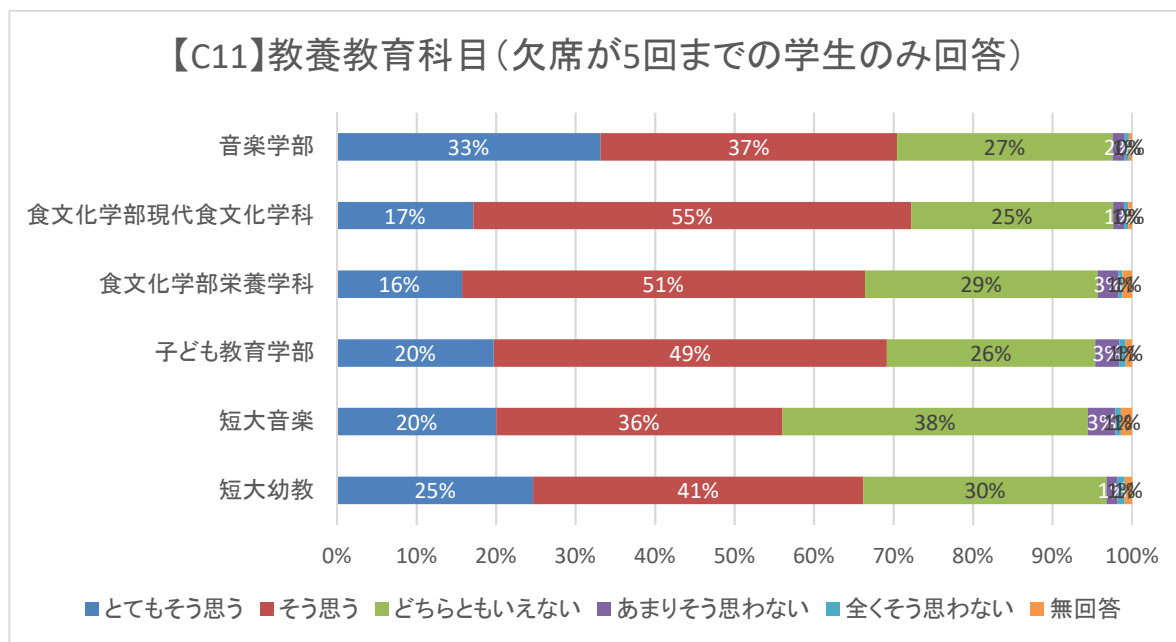
【B10】専門教育科目（欠席が5回までの学生のみ回答）



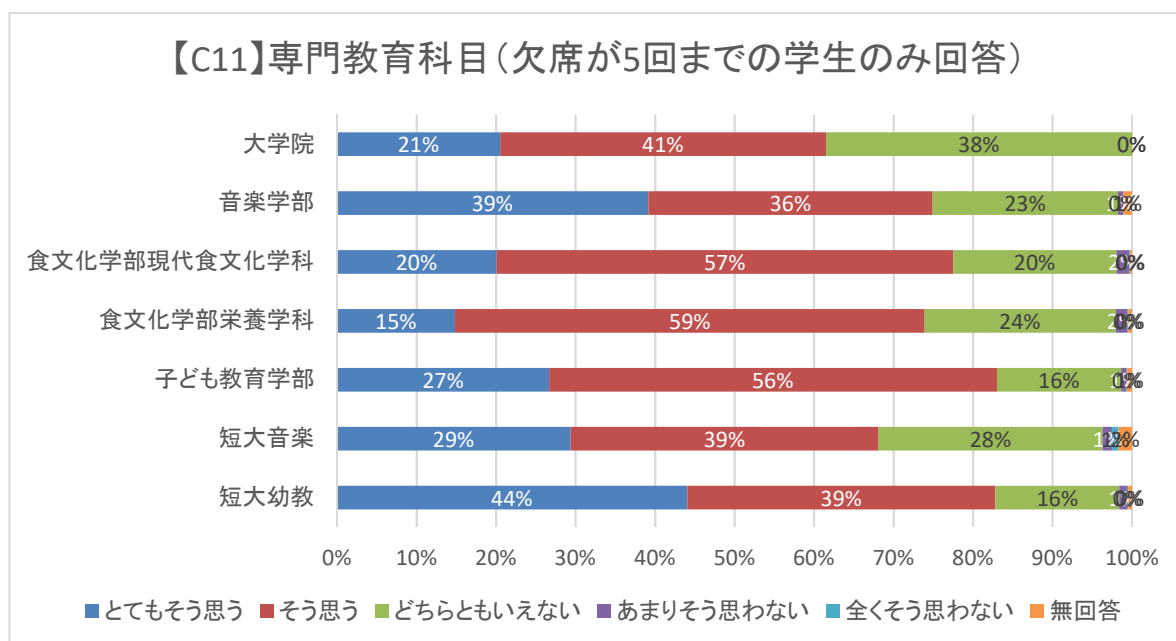
指導方法との関連も深いだろうが、授業内容を全く理解できていない（「全くそう思わない」）と回答した学生はわずかなので、専門科目の授業内容の理解度は高いと思われる。昨年度と比較すると、理解度が大幅に改善したと回答したのは大学院学生であり（66%→82%）、短大音楽専攻の学生であった（79%→89%）。ちなみに音楽学部と栄養学科の学生の理解度は多少高まり、子ども教育学部学生のそれは変化がなかった。理解度が下がったと回答したのは現代食文化学科学生（85%→83%）および短大幼教専攻の学生（91%→86%）であった。

C 授業の成果に関する質問

11 あなたはこの授業のシラバスに示している到達目標に達しましたか。

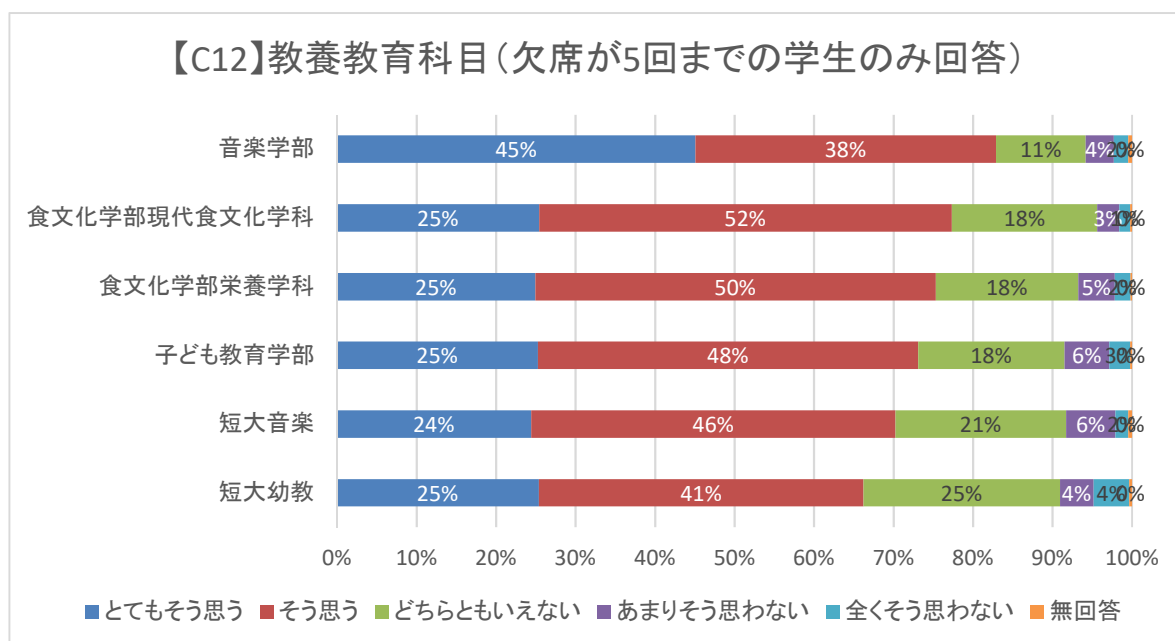


学部学科でばらつきはあるが、「とても思う」または「そう思う」と回答した学生の割合は56%～72%（H28年度61%～82%）であり、「あまりそう思わない」または「全くそう思わない」と回答した学生の割合は2%～4%（H28年度1%～3%）であった。概ね学生は到達目標に達したと認識しているが、それらの割合はH28年度の肯定的評価の割合に比べると低下している。部局別にみると、現代食文化学科および音楽学部の学生の肯定的評価率は70%以上であり、相対的に高評価であるが、短大音楽専攻学生のそれは60%を下回っていた（H28年度62%）。短大音楽専攻学生における教養科目の到達目標や授業進行、および意識についての調査・検討が必要である。また、短大幼教専攻学生の肯定的評価率のみH28年度の82%から66%へと16ポイントも大幅に下降している。原因の究明と対策が急務である。

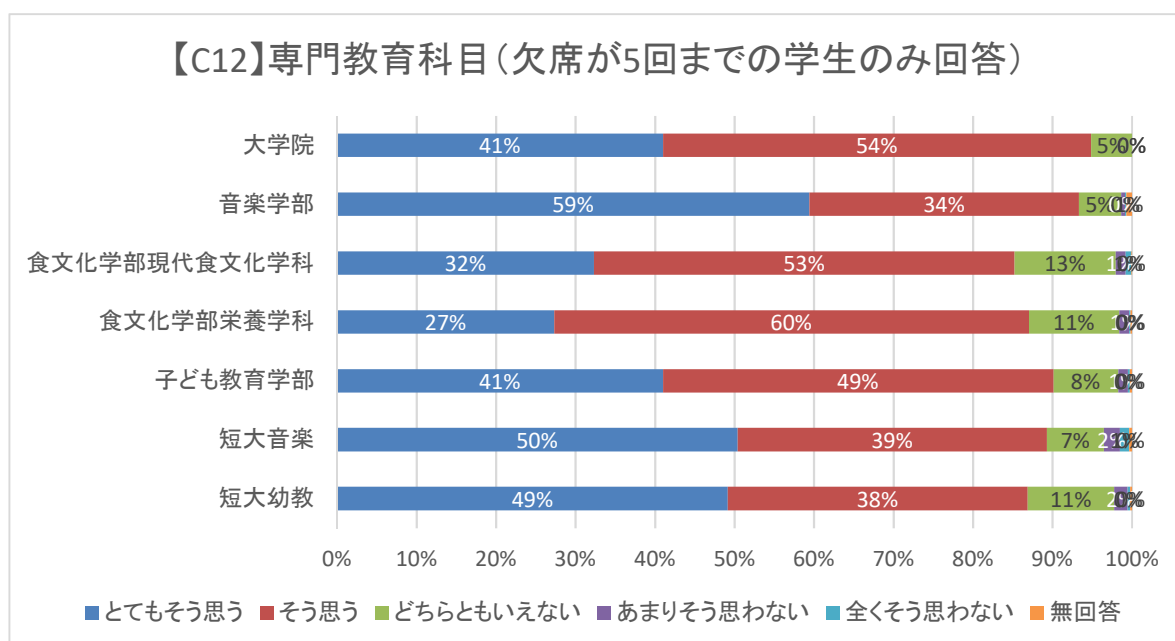


各部局の学生の「とても思う」または「そう思う」の回答率は62%～83%（H28年度59%～90%）であり、「あまりそう思わない」または「全くそう思わない」の回答率は0%～2%（H28年度0%～4%）であり、H28年度の回答率と比べると部局間のばらつきは縮小した。大学院学生の肯定的評価率は62%（H28年度59%）であり、若干の改善が見られた。だが、専門教育が主である大学院においては、さらなる取り組みが必要である。

12 この授業の内容は興味深いものでしたか。

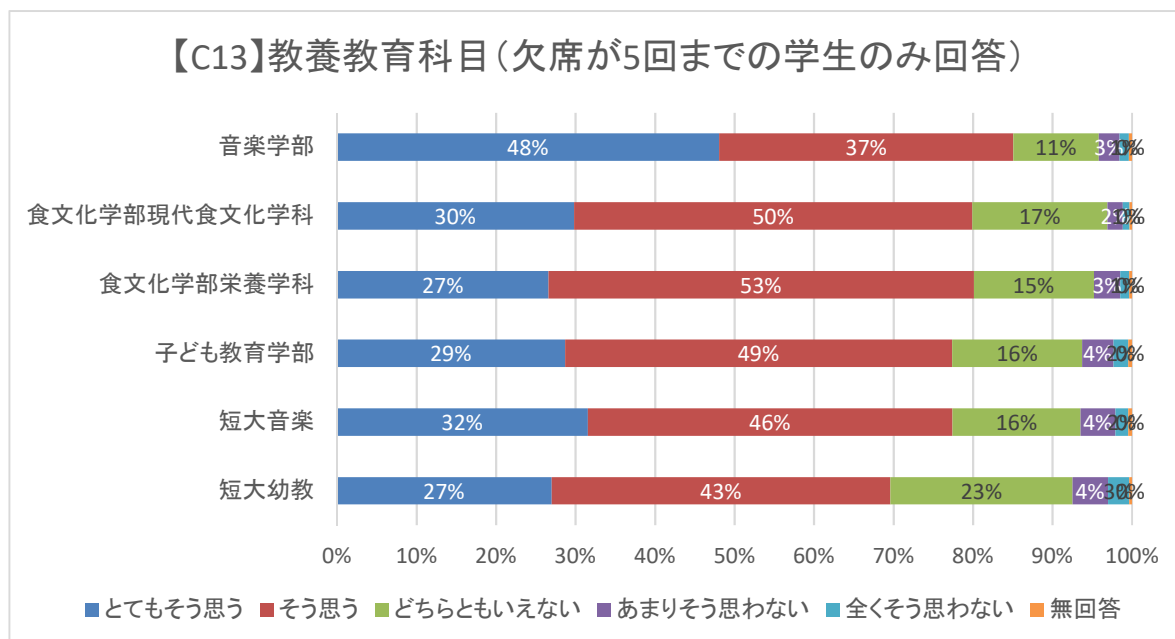


各部局の学生の「とてもそう思う」または「そう思う」の回答率は66～83（H28年度76～83）であり、「あまりそう思わない」または「全くそう思わない」の回答率は4～9（H28年度3～7）であった。部局間にばらつきがあり、肯定的評価率が減少傾向にある。なかでも短大幼教専攻学生のそれは66%しかなく、H28年度の82%から16ポイントも激減している。原因の究明および対策が急務である。

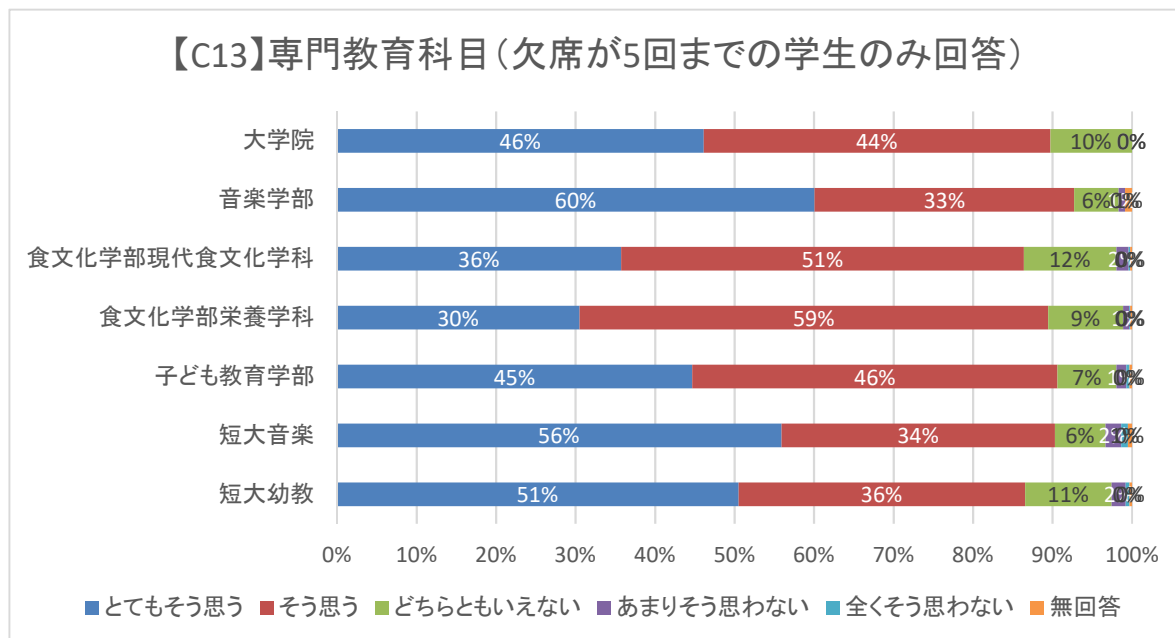


各部局の学生の「とてもそう思う」または「そう思う」の回答率は85～95（H28年度81～96）であり、「あまりそう思わない」または「全くそう思わない」の回答率は0～3（H28年度0～2）であった。H28年度と同じくH29年度も9割前後の学生が専門科目の授業に興味深かったと認識している。授業が、学生の専門的知識・技術を修得したいという欲求に合致した結果だと思われる。

13 この授業は全体として良い授業であったと思いますか。

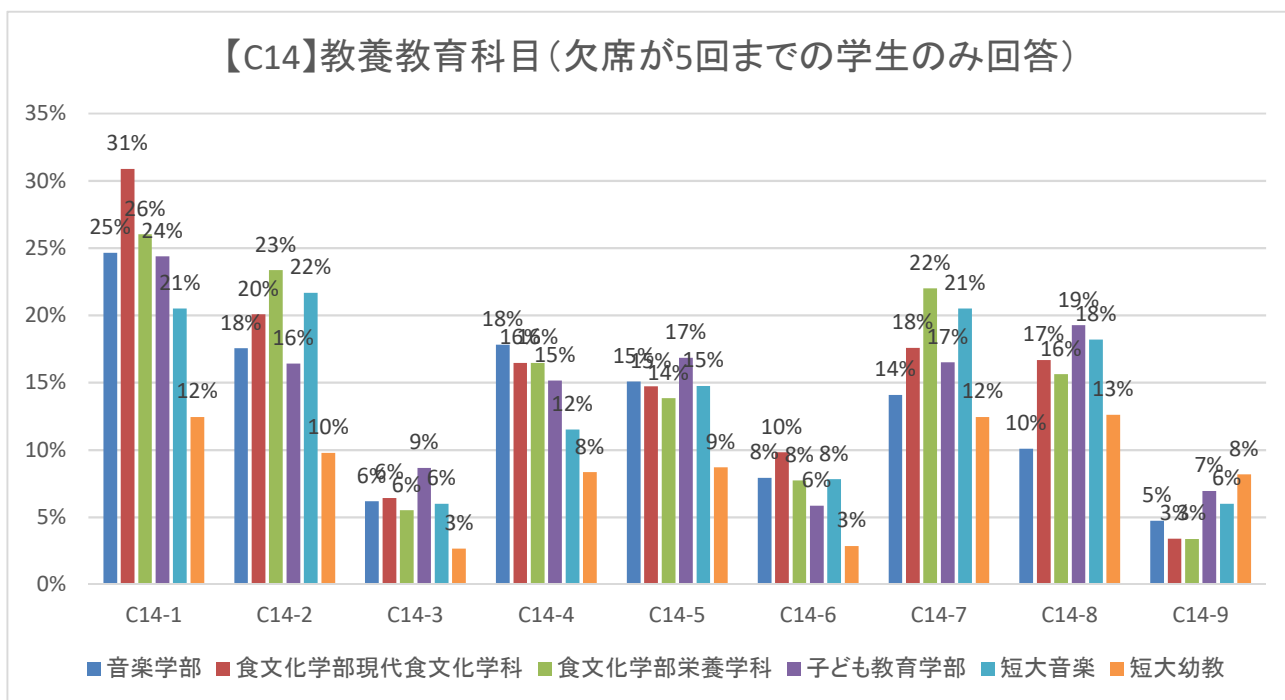


各部局の学生の「とてもそう思う」または「そう思う」の回答率は70%～85% (H28年度80%～87%) であり、「あまりそう思わない」または「全くそう思わない」の回答率は3%～7% (H28年度1%～5%) であった。7割以上の学生が良い授業であったと認識している。しかし、部局間にばらつきがあり、肯定的評価率が減少傾向にある。「11 あなたはこの授業のシラバスに示している到達目標に達しましたか」および「12 この授業の内容は興味深いものでしたか」への回答においてみられたように、ここでも短大幼教専攻学生の肯定的評価率は70%と相対的に低く、H28年度の83%から13ポイントも下降していた。原因の究明および対策が急務である。



各部局の学生の「とてもそう思う」または「そう思う」の回答率は87%～93% (H28年度85%～93%) であり、「あまりそう思わない」または「全くそう思わない」の回答率は1%～3% (H28年度0%～3%) であった。H28年度と同じく9割前後の学生が、履修した授業は良い授業であったと認識している。専門科目の授業が学生の自己実現欲求に合致した結果だと思われる。

14 この授業を受けた成果としてあてはまる項目について、全てを選択してください。

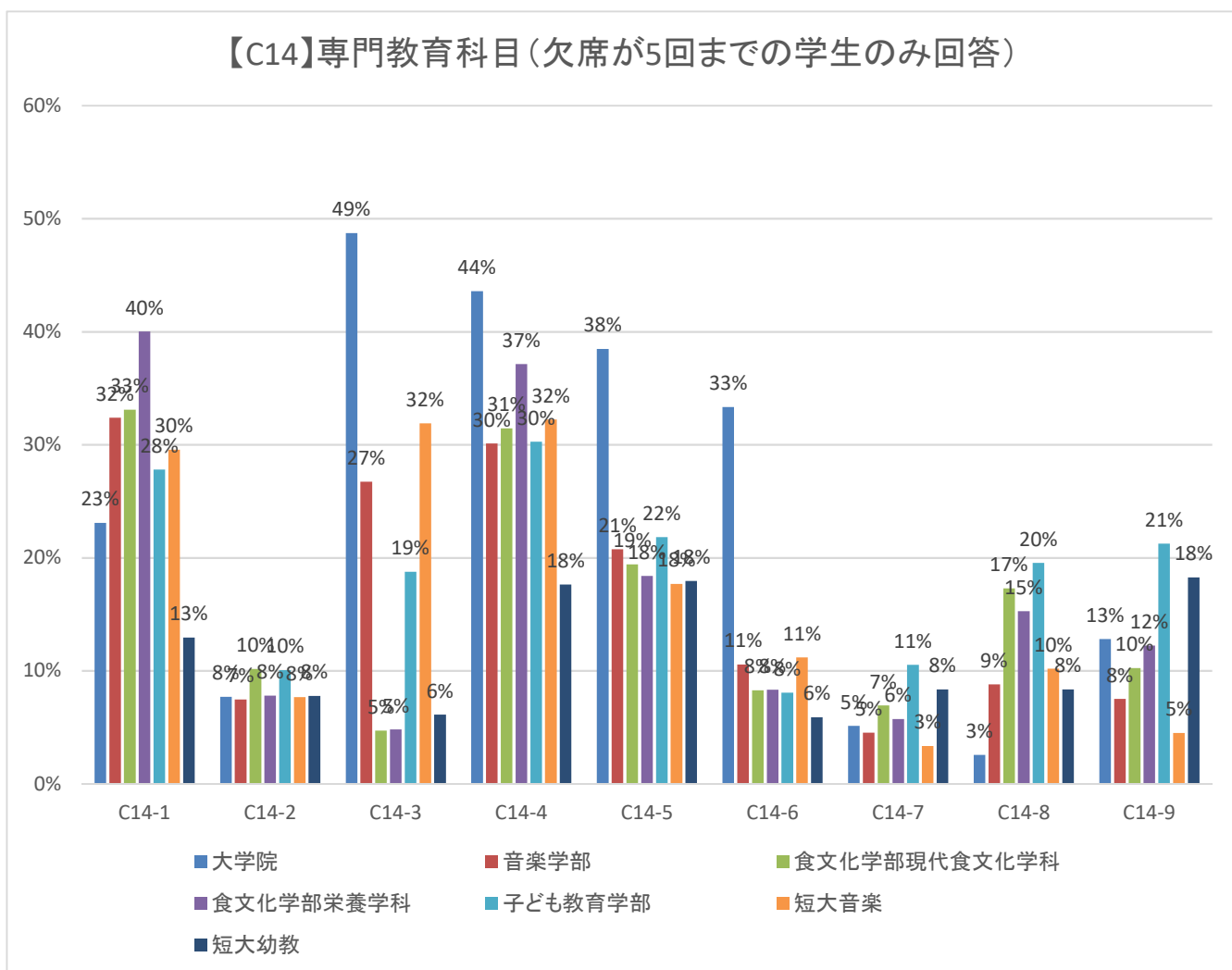


- 14-1 専門的知識や技術、または言語能力や ICT 活用に力などが身に付いた。
- 14-2 人間や社会、文化や自然などへの理解が深まった。
- 14-3 表現力やプレゼンテーション能力、演奏技術や表現力が身に付いた。
- 14-4 さらに関連分野を学ぶ意欲がわいた。
- 14-5 進んで取り組む実践力が身に付いた。
- 14-6 問題を発見して解決する力が向上した。
- 14-7 人としての生き方を考えることができるなど、人間形成に役立った。
- 14-8 コミュニケーション能力やお互いに協力し合う力が向上した。
- 14-9 職業を選択する力の向上や、職業に就く意欲がわいた。

部局間に差異はあるが、H28 年度の結果とほぼ同じ結果であった。すなわち、「専門的知識や技術、または言語能力や ICT 活用の力などが身についた」「人間や社会、文化や自然などへの理解が深まった」「さらに関連分野を学ぶ意欲がわいた」「進んで取り組む実践力が身についた」「人としての生き方を考えたり、人間形成に役立った」「コミュニケーション能力やお互いに協力しあう力が向上した」といった項目が選ばれた割合が比較的高かった。一方、「表現力やプレゼンテーション能力、演奏技術や表現力が身についた」「問題を発見して解決する力が向上した」「職業を選択する力の向上や、職業に就く意欲がわいた」といった項目が選択された割合は相対的に低かった。

質問項目が前回使用のものから変更されていないので、調査結果は漠然としたままである。また、授業担当者には授業評価アンケートの結果がフィードバックされているので、授業担当者は、授業目標とアンケート結果を照合し、両者の合致度を高められる、より良い成果のための方法を明らかにすべきであろう。

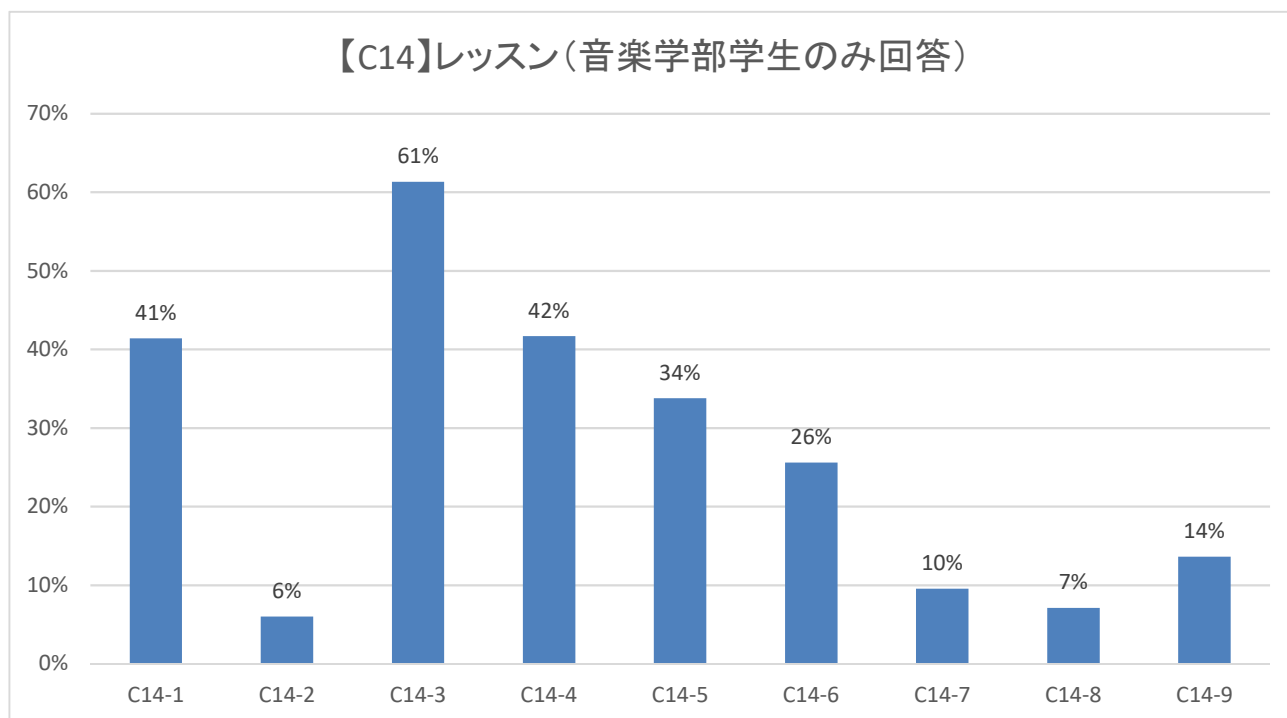
14 この授業を受けた成果としてあてはまる項目について、全てを選択してください。



- 14-1 専門的知識や技術、または言語能力や ICT 活用に力などが身に付いた。
- 14-2 人間や社会、文化や自然などへの理解が深まった。
- 14-3 表現力やプレゼンテーション能力、演奏技術や表現力が身に付いた。
- 14-4 さらに関連分野を学ぶ意欲がわいた。
- 14-5 進んで取り組む実践力が身に付いた。
- 14-6 問題を発見して解決する力が向上した。
- 14-7 人としての生き方を考えることができるなど、人間形成に役立った。
- 14-8 コミュニケーション能力やお互いに協力し合う力が向上した。
- 14-9 職業を選択する力の向上や、職業に就く意欲がわいた。

上記9項目のうち、選択された割合が各部局に共通して高い項目は「専門的知識や技術、または言語能力や ICT 活用の力などが身に付いた」「さらに関連分野を学ぶ意欲がわいた」「進んで取り組む実践力が身に付いた」であった。この結果は、専門教育の特徴を反映していると思われる。一方、選択された割合が低い項目は「人間や社会、文化や自然などへの理解が深まった」「人としての生き方を考えることができるなど、人間形成に役立った」であった。これらの項目は教養教育的性格をもつものである。また、H28 年度の結果と同じく「職業を選択する力の向上や、職業に就く意欲がわいた」が選択された割合は相対的に低かった。これについては引き続き対策を講じる必要がある。

14 レッスンについての評価



- 14-1 専門的知識や技術、または言語能力や ICT 活用に力などが身に付いた。
- 14-2 人間や社会、文化や自然などへの理解が深まった。
- 14-3 表現力やプレゼンテーション能力、演奏技術や表現力が身に付いた。
- 14-4 さらに関連分野を学ぶ意欲がわいた。
- 14-5 進んで取り組む実践力が身に付いた。
- 14-6 問題を発見して解決する力が向上した。
- 14-7 人としての生き方を考えることができるなど、人間形成に役立った。
- 14-8 コミュニケーション能力やお互いに協力し合う力が向上した。
- 14-9 職業を選択する力の向上や、職業に就く意欲がわいた。

レッスンでは学生と教員が1対1で向き合い、教員は個々の学生に即応した内容と方法を提供しやすいので、どの設問に関しても評価が高い。自由記述も多くが高い満足度を示している。学生の90%は欠席が2回以下であり、59%は全回出席しており、49%は毎日3時間以上練習している。1時間未満という回答もあるが、それは副科レッスンに関する回答であろう。

「この授業に対する担当教員の意欲や熱意を感じましたか」「この授業の内容は興味深いものでしたか」「この授業は全体として良い授業であったと思いますか」の3項目に関しては、「とてもそう思う」という回答の割合がそれぞれ84%、84%、87%であった。「良かった点」についての自由記述欄には「的確で分かりやすい指導で、沢山学び、吸収させて頂きました」「個々の演奏技術に対応してレッスンをしてくださいました。ピアノの演奏の仕方だけでなく、音楽の中に入ったレッスンでした」「先生の熱意が伝わってきて私も熱心に練習するようになった」など、前述の高い評価の根拠となる学生の思いが記されていた。「改善してほしい点」についての記述欄には「もっと厳しくても、私は大丈夫です。小さな改善点だったとしても、ぜひ教えて下さい」というさらなる高みを目指す記述もあった。

レッスンでは学生一人ひとりに適した指導や、同じ学生であっても日々の心身の状態を見極めての指導が必要である。レッスンは逃げ場のない個人指導であるだけに、常にセンシティブな対応が求められる。学科会議等で、創意工夫が奏功してレッスンを充実させられた事例を共有したり意見交換をしたりする機会を増やしていくべきであろう。

以上